

『言語学論叢』創刊の頃

橋本邦彦

今、1982 年発行の『言語学論叢』創刊号を手にしている。若葉色のうっすらと刷毛ではいたような柄の厚口の表紙以外、表も裏も体裁は 2000 年発行の第 19 号とまったく同じである。頁をめくると、林四郎先生の『言語学論叢』の発刊に当たって」という心温まる巻頭言を目にする。先生の学生に対する心配りと愛情に満ち溢れた名文である。その後、学生の手になる 5 編の論文と 1 編の書評が続く。まだ、ワープロの普及していなかった当時、400 字詰原稿用紙とタイプライターを駆使して書いた力作ぞろいである。

私の在学していた頃（昭和 53～57 年）の大学院は、筑波大学創立時の学部学生がようやく進学してきた時期にあたっていた。それまで専ら外部からとっていた学生と生え抜きの学生とが一つの研究機関で出会い、わくわくするような活気が漲っていた。一般言語学と応用言語学の学生は、文芸・言語研究棟の 2 階エレベーター奥の比較的大きい部屋をあてがわれていた。授業の合間にコーヒーを飲みながら、とりとめないおしゃべりに興じたり、言語（学）の問題について自由気ままな議論に花を咲かせたりしていた。

私は一般言語学を専攻するつもりでいたが、その方面の学生とスタッフはまだ少数派で、どちらかというと、応用言語学色が強かった。因みに、昭和 56 年度「大学院便覧」の言語学開講科目を眺めてみると、言語学特講 A（セム語学）：津村俊夫、言語学特講 B（アルタイ語）：城生伯太郎、言語行動論研究：林四郎、言語発達論研究：芳賀純、言語運用論：比嘉正範、数理言語学研究：草薙裕などが記されている。このうち、城生先生はまだ東京学芸大学に勤務されていて、きびきびした歯切れのよい口調の青年研究者であった（おそらく、一般言語学の多くの部分を、先生が負って下さっていたにちがいない）。

私は、一般言語学と応用言語学、それに英語学の領域を徘徊する身であったが、どの分野の先生方も実によく面倒をみてくれたし、どの専攻の学生た

ちも勢力的に読書会を企画しては、仲間に加えてくれた。

その中で、林先生は一つの提案をして下さった。それは、月に一回教官、学生参加の談話会を開いたらというものである。この提案はすぐに実行された。教官も学生も等しい視線で、日頃考えていること、研究している内容を、披露し合う機会を得た。それが積み重なっていくにつれて、一般・応用の学生間に一体感が生まれてきた。発表の場を共有することで、研究の楽しさを享受できるようになった。もっと自分たちの意見や発想を発信したいという欲求も芽生えてきた。

大学院生の発表の場は、授業の中、談話会、それにせいぜい修士論文の一部をお披露目する関連学会に限られていた。論文を発表するとなると、よほどのできと幸運がなければ、無理である。そこで私たちは、論文の発表の場を模索した。誰かを当てにするのではなく、自らの手で研究誌を作ってしまったらどうだろうと考えた。冷静に見れば、はなはだ乱暴な試みではあるが、その頃の周囲の雰囲気は私たちを後押ししていたのである。

幸い、土浦に印刷業を営む知り合いがいたので、学生 5 人が連れ立って、交渉に赴いた。先方も熱意を感じたのか、気の毒に思ったのか、かなり抑え目の金額で印刷を引き受けてくれた。

雑誌名を決める過程については、残念ながら、思い出せない。「発刊に当たって」によれば、筑波大学の前身の東京教育大学文学部の言語学研究誌と同じ名称である。たぶん、「勝手ながら、いただいた」のではなく、いろいろ候補を出し合って最終的に残ったものが、たまたま同じだったというのが、ことの真相のように思われる。ともあれ、結果的に、伝統を引き継いだことになる。

夏目漱石は、最初になまこを食べた奴はえらいと言ったそうだが、最初に雑誌を作った奴はそうえらくはない。動機はいたって不純である。自らの業績作りの場を確保したかっただけの話である。その後どうなるかなどは、まったく考えていなかった。この一冊が大事なのである。『論叢』に関しては、第 2 号、第 3 号と続けていった者が偉い。継続していくことは、はなはだ難しいからである。だから、第 20 号を編集し、そこに研究成果を発表する者は、今の時点で一番偉い。

学会や研究会が増え、発表の場が格段に広がったとはいえ、大学院に自前

の研究誌があることは、誇らしくすばらしいことである。「20」はきりのよい数字ではあるが、願わくは、どんどん半端な数字を重ねて、号数を大きくしていてもらいたい。学問は、忘れられていく数多くの研究の蓄積の上に美しく花開くものであるから。